

## シェイクスピアの「史劇」を動かす女性たち（其の二）

神澤 和明（英語科）

## The Roles and Portraits of Women in Shakespeare's History Plays (2)

Kazuaki KAMIZAWA

Like Joan La Pucelle in Part 1, Margaret, Queen to Henry VI, plays the most important part in Part 2 and Part 3 of "Henry VI" trilogy. With arrogant pride and passionate love she has ridden into the critical battles "for" King Henry VI. Both King's inactive and her strong belief in sacred kingship were really the cause of "the War of Roses". In this brief essay, I try to analyze the personality of Margaret and what has made her acts so uniquely.

## 1. 始めに（『第1部』から『第2部』『第3部』へ）

『ヘンリー六世第1部』で劇的中心となっていた人物は、イギリスの英雄タールボットと、オルレアン乙女、ジャンヌ・ダルクである。

イギリスとフランスの間で戦われた「百年戦争」を背景とする「スペクタクル劇」としてのこの芝居の面白さは、舞台上で上演することでより明らかにされる。場面が頻繁に素早く切り替えられ、イギリスの宮廷場面においては貴族たちの抗争をひきおこす野心と嫉妬の陰険なぶつかり合いが、サスペンスを募らせる。一方、フランスの戦場ではダイナミックな戦闘場面が繰り返され、それらが相乗効果をなして、観客の心を躍らせてゆく。

上演される舞台面を思い描くならば。

二重舞台を駆使して、城壁に見立てた上舞台に現れる敵将と平舞台である城門前の軍勢がにらみ合っており、舞台の立体感を強調する。英仏両国の軍勢が、舞台上手、下手、及び正面奥のドアから、客席に突き出た張り出しの本舞台に向かってひっきりなしに押し入り、また逃げ出して来て、勝者と敗者が一瞬に入れ替わる。舞台効果として、大砲は轟音をとどろかせ、突撃と退却のラッパが響き渡る。そこに剣や槍が打ち合わされる鋭い金属音と、兵士達の怒号と悲鳴が交じってゆく。スタイルで、また色づかいで区別される服装や武装を身にまとった集団が舞台をカラフルに色分けし、各陣営の軍旗が風に大きくひるがえり、はためている。

こうした芝居では、登場人物たちの心理の綾を描き出すことは、あまり重要とはされない。彼らは結局、舞台

を支配する大きな力、それは人間を凌駕する運命の力にも似ているのだが、その力によって動かされている存在である。マクベスがつぶやくように、一つの「役割」を演じきれば消えてゆく、幻と同じものなのだ。

そして実際、タールボットはそうであった。フランス全軍に怖れられた無双の英雄でありながら、イギリス本国における貴族（重役）たちの不和と優柔不断のために、窮地に援軍を得ることができないまま兵を率い、一人息子とともに戦場に倒れる愛国者（中間管理者）。舵取りをなくしたイギリスが、多くの犠牲を払って獲得して来たフランスでの領土を、更に多くの血を流しながら失ってゆく。歴史の大きな風に逆らうことができず、栄光あるかつての勇敢なイギリスが没落してゆくさまを象徴する人物。そんな悲劇の英雄という役割を彼はまっとうして観客に涙を催させた。だが彼がどんな「人間」だったのか、我々には解らない。戦闘以外にどのような悩みを抱いていたか、何を喜び、何を夢見ていたのか。「記号」としての彼以外の姿を、我々は思い描くことができない。

対して、オルレアン乙女はどうか。彼女は意気消沈した皇太子シャルルを励まし、どん底にあったフランスを元気づけ、軍の先頭に立って戦いに導き、イギリス軍をフランスから追い出す原動力となった。フランスが勢力を盛り返したことで自体は「大きな力」によるものであるが、ジャンヌ・ダルクの力が大きくそれに預かっていることは否定できない。タールボットが歴史の力に対して無力であったのに対し、ジャンヌは有力であったのだ。彼女が歴史の車輪を回したと言ってもよからう。私が『ヘンリー六世』劇を、女性が動かしている芝居だと

した理由の一つが彼女の「効果」であった。

だがそれ以上に彼女は、単なる記号ではなく人間だという点で、タールボットとは大きく異なっている。「愛国心」という抽象的で無粋なものだけで満たされていたタールボット。一方ジャンヌには聖母マリアへの信仰心、フランスへの愛国心といった「美しい」ものだけでなく、他の貴族たちを見下し、戦いに倒れたタールボットを辱める傲慢さと、皇太子の愛人となる淫乱さも兼ね備えている。確かに作者シェイクスピアは、当時のイギリスの歴史観にのっとり彼女を「魔女」として造型した。力の源として悪霊を呼び出す場面もあるし、また法廷の場面では浅ましく命乞いをさせることで、彼女の小人物ぶりを強調したりもしている。それでも彼女は魅力的である。それは劇全体の中で、人間として立っているからだ。

ではジャンヌが去った『第2部』『第3部』ではどうなのか。「百年戦争」から「バラ戦争」に背景が代わり、舞台はほぼイギリス国内に限定される。同じように陰謀と戦闘が繰り返され、勝者と敗者は気まぐれのように入れ替わる。相変わらず人間たちが歯車かチェスの駒のように動かされているその劇世界の中心に、我々はまた一人の女性の姿を見いだす。それはヘンリー六世の後、マーガレットである。

この小論においては、『ヘンリー六世』の『第2部』『第3部』におけるマーガレットを「舞台面」の視点から追いかけて、彼女が果たしている役割とその意義を考察する。

だがその前に、作者が「ヘンリー六世」劇全体に仕掛けた技法（トリック）をみることにしよう。

## 2. 作者の技法に隠された主題：冒頭場面のアイロニー

『ヘンリー六世第2部』はヘンリー六世が新妻マーガレットを迎える明るい場面が始まる。『第1部』がヘンリー五世の棺を見送る葬送の場面が始まったことと比べれば、まったく異なる気分の幕開きと思われるかもしれない。だが実際には、この二つの冒頭場面はその形と意味において、おおいに共通するものをもっている。

場所はいずれもイギリスの宮廷である。イングランドを動かす有力貴族たちが顔を揃えている。多くの顔ぶれが一致している。新しい顔はヘンリー六世、マーガレット、サフォーク、つまり芝居の中心となる三角関係の頂点にいる人々。

『第1部』では、ヘンリー五世を追悼して貴族たちが贈る心打つ哀惜の言葉が、いつの間にかお互いを誹謗中傷しあう、罵り合いの言葉に変わっていった。新王の大

叔父、聖職者でありながら王位への野心を示す枢機卿ボーフォートと、新王の叔父、摂政としての地位にある公爵グロスターという、王の親族同士の対立を中心にして、フランス摂政の地位を奪い合う貴族たちのそれぞれが妬みと野心に満ちた言葉を口にして、事態は収拾がつかなくなっていった。「死」のもつ「荘厳」なイメージから人間のエゴという醜い「俗」へ、全く逆の気分への急転。そしてこの混乱に終わる場面は、この後の芝居の展開、イングランドの軍勢が敗れフランスでの領土権を失う形で「百年戦争」が終わるということを暗示していた。もちろん観客は歴史の事実として、イングランドがフランスから撤退を余儀なくされたことを知っている。であるからこの場面を見ながら、作者の意図したアイロニーを感じ取ったことであろう。

『第2部』は、華やかな「結婚」の契りで始まる。「葬送」と「結婚」は、これも全く相反するものである。

舞台の中心にいるのは若々しい王と美しい王妃のカップルである。そして同じく貴族たちが二人を取り巻いている。二人の愛の言葉が取り交わされ、貴族一同の喜びに満ちた「万歳」の音が響き渡る。ところがこの喜ばしい気分は、サフォークの手からグロスターに渡されたフランス王との平和条約の条項によって一掃される。その条項には、イギリスが苦勞して手に入れたフランス領土のうち2州をフランスに返還すること、花嫁にはなんら持参金が伴わないことが記されていた。これが貴族たちに大きな失望と怒りを抱かせる。

王、王妃、サフォークが退場すると、グロスターが長広舌をふるってサフォークとマーガレットを非難する。ネヴィル家のソールズベリーとウォリックも彼に同調の声をあげる。グロスターが退場すると、今度は枢機卿がグロスターを強く非難する。摂政として権力をもつグロスターを良く思わない貴族たち、サマセットとバッキンガムは枢機卿に味方してグロスターを摂政から引きずりおろそうと語る。枢機卿が退場すると、サマセットは枢機卿の傲慢さを非難し、バッキンガムと二人で彼ら（グロスターと枢機卿）に取って代わろうと話し合う。この二人が退場するのを見送って、ソールズベリーはグロスターを支持することを息子ウォリックと義弟ヨークに告げる。ヨークはしかし一人きりになると、自分は王位の継承権を持つ人間であり、本当の狙いはヘンリー王に代わって王になることだと観客に宣言する。これは『リチャード三世』のグロスターの独白と比較すると面白い。野心を抱く人物たちが次々に敵対者を告発し、彼らが姿を消した途端、残った者から同じように嘲笑され攻撃されてゆくおかしさ。このように『第2部』でも、冒頭に貴族たちの不和と敵対関係がはっきりと示されてしま

う。最初にあった喜びの気分はすっかり消えて、陰鬱な陰謀と争乱の予感が舞台全体を覆ってしまう。再び観客たちは、強烈なアイロニーを感じずにはいられない。

『第3部』の冒頭にはこのような「仕掛け」は無い。単純に『第2部』の終わりを引き継ぐに過ぎない。その点からも『第2部』『第3部』は緊密につながった作品ということがわかる。三部作は『第1部』と『第2部・第3部』の2つのパートに分けられると言って良い。

更にアイロニーを見て行こう。不吉な兆候を持ち込むのは「フランス」である。『第1部』ではフランスの戦場、ひいてはオルレアン（聖女）であり、『第2部』ではフランスに属するレニエ国王の娘だ。

『第1部』の葬送シーンで中央にあるのはヘンリー五世の棺である。『第2部』では中央にいるのは王と王妃のカップル。すると「棺」と「カップル」は同じ存在になるのではないか。ヘンリー五世の棺がイングランドの混乱の引き金であったように、ヘンリー六世の結婚が、イングランドの更なる混乱を招くきっかけになる。

呪われた「死」と祝福される「結婚」が、同じく「破滅」を導くという皮肉。そしてここに『リチャード三世』の始まりの場面を並べて見れば、更にアイロニーは強調される。そこでは、亡きヘンリー六世の棺に寄り添って嘆く皇太子妃アン（アン）の姿を観客は見る。『ヘンリー六世第1部』と同じ、葬送の場面だが、舞台中央に置き去りにされた棺の中にあるのは、今度はヘンリー六世なのだ。その横にアン皇太子妃を並べれば、それは『ヘンリー六世第2部』での、ヘンリー六世と王妃マーガレットのカップルの姿と重ね映しになって来る。そして義父ヘンリー六世と夫・皇太子の死を深く悼み、彼らを殺害したグロスターを憎んでいるはずのアンは、そのグロスターの口ぶりに乗せられて、憎むべき敵からの求婚を受け入れてしまう。「葬送」と「求婚」、「憎しみ」と「愛情」、「美」と「醜さ」。両極にあるはずのものが、いつか混ざり合い取り替わってしまう、その強烈なアイロニー。『マクベス』で魔女達が唱える"Fair is foul, and foul is fair"の言葉が耳に響いてくるようだ。私たちは『ヘンリー六世』『リチャード三世』の「四部作」を通じた作者の仕掛けに感心せずにはいられない。

### 3. 王妃マーガレットの転換点（1）

#### 3.1 マーガレットとサフォーク

『ヘンリー六世第2部・第3部』における王妃マーガレットを、時間の流れにそって見てゆけば、大きく二つの時期に分けられる。その前半は愛人のサフォーク公とともに、邪魔になる有力な貴族たちを排除して権力を「王

位」に集中させて行く時期、これはランカスター家の内紛の時期ともいえる。そして後半は、ヘンリー六世から王位を奪ったヨーク家と戦う時期、それは「バラ戦争」のまっただ中である。後半の時期は更に小さな二つに分けることができる。ヘンリー王を前に立てて王位を守ろうとした時と、ヨークに王位を継承させる約束をした王を見捨てて、息子の皇太子を王にしようとする時である。

実はマーガレットについて言うなら、もう一つの分岐点がある。『第1部』の終幕近く、フランスの戦場を逃げている時にサフォーク伯に捕らえられる前と、その後である。この芝居に彼女が登場してくるのは「サフォーク以後」であるから、「サフォーク以前」の彼女は描かれないのだけれど、彼女の運命を考える場合、これは大きな転換点である。「サフォーク以前」の彼女には、イングランド王妃の地位などまるで考えられなかったのであるから。サフォークが彼女に強く惹かれたため、そして彼に強い野心があったため、彼女はヘンリー六世の王妃となり、バラ戦争の中心人物の一人になってしまったのである。そう考えれば、彼女は自分の意志を越えてこの政治劇に登場させられた、「巻き込まれた」人物ということになるであろう。

#### 3.2 サフォーク以前 (Before Suffork)

『ヘンリー六世』三部作では描かれなくても、マーガレット自身にはサフォークと出会う以前の人生も、当然ある。作者によって書かれたことだけによるべきではあるが、彼女がもつ幾つもの相を知るためには、「サフォーク以前」も考えておく必要がある。

マーガレットはフランス貴族であるアンジュー公爵レニエの娘だ。しかしサフォークに捕らえられた時、彼女は「ナポリ王の娘」だと名乗る。確かにレニエはナポリ王の称号をもっている。公爵よりは王を名乗る方が、ランクは上というわけだろうか。『第2部』の冒頭で読み上げられるフランスとの平和条約条項の文言によるならば、「ナポリ、シシリー及びエルサレム王の娘」ということになる。大層な肩書きが並ぶが、当時においてそうした称号は名誉としての価値しかなく、実質において大きな権力や財力が伴っているわけではなかった。そのことは『第2部』1幕1場で早々に、グロスターとヨークによって次のように言及されている。

*"Gloucester ...the poor King Reignier, whose large style /  
Agrees not with the leanness of his purse."*

*"York And our King Henry gives away his own / To match  
with her that brings no vantages."(Part2, A.1.S.1)*

いや、マーガレット自らもそのことを認めている。引け目を感じてさえているようだ。



*"Margaret She (the Duchess) bears a duke's revenues on  
her back,/ and in her heart she scorns our poverty."*

*(Part2, A.1.S.3)*

高い身分にありながら実質（財力）がともなわない貴族にとって武器となるのは、身につけた教養と誇り（プライド）である。マーガレットは自身の「王女」という地位に誇りをもっている。それは「王」という地位を至高のもの、侵されることのない高貴なものとすることによって支えられる考え方だ。それであるからこそ、富や権力を持たない彼女たちも、特別な存在として胸をそびやかせていられる。そうした「思想」は彼女自身の言葉の端々に見て取ることができる。大体に、戦場でサフォーク伯に捕虜にされた時、彼女は少しも怖れた様子を見せていなかった。彼女は敵方の将に対して、まるで対等の立場にあるように振る舞っている。

*"Margaret What ransom must I pay before I pass? ...To be a  
queen in bondage is more vile/ Than is a slave in base  
servility: For princes should be free."(Part1, A.5.S.3)*

だが家族のヒエラルキーに素直である。

*"Margaret An if my father please, I am content."*

*(Part1, A.5.S.3)*

王に対する彼女の尊敬は、ヘンリー六世との対面の言葉において、最も強調される。

*"Margaret Great King of England, and my gracious lord, /  
The mutual conference that my mind hath had,/ By day, by  
night, waking and in my dreams,/ With you, mine alder-  
liest sovereign,/ Makes me the bolder to salute my king/  
With ruder terms, such as my wit affords/ And over-joy of  
heart doth minister."(Part2, A.1.S.1)*

このように、マーガレットという女性の思想的基盤には、自分たちの身分がよってたつところの、王という存在への強い敬意の念が確固として存在している。それが強くあるために、ヘンリー六世の無力によって王という権威が侵されてしまっている事に対する彼女の失望と怒りは、この上なく強いものになってしまう。『第2部・第3部』に描かれるイングランドの混乱状態の中でマーガレットが大きな役割を果たす理由が、「イングランド王」の地位に対する失望と、王妃という自分の地位（そして夫ヘンリーの王という地位）が、貴族たちの誰よりも高いものとして確立されるべきであるという強いプライドから来ていると理解するなら、「サフォーク以前」のマーガレットを考えることは極めて重要であろう。

ところで何故、彼女は戦場で捕らわれたのであろうか。

『第1部』の中心人物であるジャンヌが直前に戦場で捕らわれる場面と呼応させたと考えることもできる。観客はこの二人の女性の中に何かの継続を感じるだろう。

『第2部・第3部』での彼女の役割から逆算して、彼女の中にある勇敢さを既に暗示したと考えることもできる。だが彼女は別に、ジャンヌ・ダルクのように甲冑に身を固めていたのではない。後になっても、彼女は軍を集めこそすれ、みずから剣を振るったわけではない。サフォークに引き据えられた彼女は、おそらくドレスに身をつつんだ、颯々たる姫の姿である。

彼女が戦場にいたのは、父親がそこにいたからであろう。父親という確立された権威、年上の堂々たる男性に対する信頼、そのような存在との一体化。若い女性が身近な年上の異性に、強い信頼を通して愛情を抱く心理。私はそれをマーガレットにも感じて、彼女の中に一種のファーザーコンプレックスを見いだす。そして「父親」の代わりに「王」という単語をおいても、この精神状態は成り立つ。となってくれば、マーガレットの「王」のあり方に対する強い思いは、ファーザーコンプレックスのひとつの出現の仕方と見なすことができる。

### 3.3 サフォークとともに (with Suffolk)

マーガレットにファーザーコンプレックスの要素を見いだすなら、彼女とサフォークの関係についてもまた、ヒントが与えられよう。

マーガレットとサフォークの恋愛は作者のまったくの創作という見方がされている。サフォークがマーガレット王妃の「お気に入り」であったのは確かだし、彼が彼女をフランスまで迎えに行ったことも事実である。だがサフォークはマーガレットの35歳も年上であるから、恋愛関係があったとは考えられない、とされている。『ヘンリー六世』三部作と『リチャード三世』において男女の結びつき・結婚は何度も出てくるが、そのほとんどが政略結婚や淫乱な欲望によるものである。グロスター（リチャード三世）の前皇太子妃アンへの求婚や、リッチモンド（ヘンリー七世）がエドワード四世の娘エリザベスと結婚することは、典型的な前者の例、エドワード四世が時宜も弁えずグレイ夫人を妻に迎え、「キングメーカー」ウォリックを敵にしまったのは後者の例である。

そのように、愛情というものが軽視され顧みられない芝居の展開の中で、マーガレットとサフォークの関係は確かに「愛情」というものを感じさせ、別れの場において二人が交わす切々たる言葉は、観客の心にしみ込んでくるものを持っている。そうした「愛の場面」を芝居に導入するために、演劇的手法として作者が二人の恋愛を創作したと考えることは妥当であろう。とはいえ、マーガレットとサフォークの「関係」が執筆当時の俗説として広まっていたとしても、シェイクスピアを貶めることにはならない。作者の力は、それをどのように舞台上に

描き出すかにある。私はこの二人に、実際に特別な関係があったと噂されていたらと推測する。エリザベス一世とエセックス伯らにみるように、「お気に入り」とはそうした関係を自然に連想させる立場だ。多数の学者が二人の関係を否定する理由が単に二人の年齢差であることに、私は異議を唱える。ヘンリー六世と結婚した時、マーガレットは15歳であった。すると35歳年上のサフォークは50歳である。15歳の女性と50歳の男性の組み合わせは、あり得ないか否定されるものだろうか。そしてさらに、マーガレットがファーザーコンプレックスであったとすれば、ファーザーコンプレックス故にマーガレットが、頼りない同年代のヘンリー六世に愛想を尽かし、サフォークに強く惹かれていったとする図式は、なかなか興味深いものになるだろう。

さて、サフォークに導かれてイングランド宮廷にやって来たマーガレットは、そこで何を見たのか。

既に引用したように、彼女は大いなる希望と喜びに満ちてヘンリー六世と対面する。王という「絶対権力者」の王妃として招かれて、彼女は自身が権力と一体化したことを信じていただろう。七つ年上の若王ヘンリーは輝くばかりの存在に見えたらう。居並んで頭を垂れる貴族たちの姿は、彼女の自尊心をいやが上にも高めたろう。

しかし、彼女が実際に見たのは、生後わずか九ヶ月にして即位したがために、周囲の者たちによって政治をはじめとするすべてのことを取り仕切られ、自分では何一つ決定することができない無力な王であり、王をないがしろにして我が権力を伸ばすことに熱中している貴族たちであった。彼女自身の言葉によれば、このようになる。

*"Margaret My Lord of Suffolk, say, is this the guise,/ Is this the fashions in the court of England?/ Is this the government of Britain's Isle,/ And this the royalty of Albion's king?/ What, shall King Henry be a pupil still,/ Under the surly Gloucester's govenance?/ Am I a queen in title and in style,/ And must be made a subject to a duke?"*

(Part2, A.1,S.3)

続いて彼女はサフォークに、フランスにおいて彼がどれほど颯爽として、貴婦人たちの心を惹きつけたかを語る。そのとき彼女は自らのことは語らないのだけれど、当然彼女も、惹きつけられた女性の中に含まれることがほのめかされる。そして彼と比較して、抹香臭いヘンリー王への強い不満が語られてゆく。

*"Margaret I thought King Henry had resembled thee/ In courage, courtship, and proportion./ But all his mind is bent to holiness,/ ..I would the college of the Cardinals/ Would choose him Pope, and carry him to Rome./ And set the triple crown upon his head."(Part2, A.1,S.3)*

サフォークとヘンリー王とが、彼女の中で比較される。そして明らかに彼女の気持ちはヘンリーではなくサフォークにある。男性としての魅力に欠けるヘンリーは、「王」という存在でしか彼女にとって意味はない。そして権力の無い王であれば、それは彼女の心をひきつけるべき何物ももたないのは当然だ。彼女にとって「父」となれるのはサフォークである。ヘンリー王とサフォークを両極とするゲージの上で、マーガレットという針は明らかにサフォークの側に振れている。ヘンリーが「王」であることはマーガレットのプライドを惹きつける上で絶対的に有利なはずなのに、それが実体を伴わないために機能することができない。そしてさらにサフォークは、その「権力者」という立場すら手に入れようとしている。

マーガレットへの愛情と同じように、サフォークには宮中において第一の権力者の座を確保したいという強い野心がある。マーガレットには、王妃という地位にふさわしい尊敬を受け、誰もを従わせる力を振るうべきだという、強いプライドがある。その内的な意志を実現するためにも彼らの目指すところは一致する。宮中における旧勢力の一掃である。

彼らがまず取り除こうとするのは、当然のごとく、摂政のグロスターだ。ヘンリー五世の弟である彼は、王を抑える地位にあるだけでなく、もっとも強い王位継承権をもつ人物でもある。さらに自分が進めていた王の結婚を、サフォークが邪魔してマーガレットを王妃に迎えさせたために、二人を憎悪しているという事情もある。

もちろん、のぞくべきなのはグロスターだけではない。マーガレットはグロスターの敵対者まで含めて、力を誇示するほとんどすべての貴族たちを敵としてみている。

*"Margaret Beside the haughty Protector, have we Beaufort/ The imperious churchman; Somerset, Buckingham,/ And grumbling York; and not the least of these/ But can do more in England than the King." (Part2, A.1,S.3)*

そして次の言葉はいかにも女性らしいと思わせる。

*"Margaret Not all these lords do vex me half so much/ As that proud dame, the Lord Protector's wife, she sweeps it through the court with troops of ladies,/ Strangers in court do take her for the Queen./ Shall I not live to be aveng'd on her?" (Part2, A.1,S.3)* (下線は筆者)

サフォークはより現実的である。そして既に摂政グロスターを失脚させる方策を立ててしまっていた。

*"Suffolk Madam, myself have lim'd a bush for her,/ And plac'd a quire of such enticing birds/ That she will light to listen to the lays,/ And never mount to trouble you again./ So, let her rest... Although we fancy not the Cardinal,/ Yet*

*must we join with him and with the lords,/ Till we have brought Duke Humphrey in disgrace./ So one by one we'll weed them all at last./ And you yourself shall steer the happy helm"(Part2, A.1,S.3)*

貴族たちの力をそぎ、権力を王に集中してゆく。摂政から実権を取り返し王の親政を行う。その目的は決してヘンリーの力を強めることではない。王に権力を集めることは、つまりは王妃の地位を高めることになる。そして王を操ろうとしているサフォークにとっては、ライバルを消し目標への道をならすことになる。サフォークがグロスターを陥れるべく実務的に陰謀を巡らして行く上で、グロスター夫人エリナーは格好の道具であった。

エリナーは広い意味では、矮小化されたマクベス夫人のような人物である。女性でありながら権力への野心に満ち、夫である摂政グロスターに王位を狙うようそそのかす。シェイクスピア当時はマクベス夫人はもっと単純化されて造型されていたから、エリナーとの相似はより大きかったろう。しかしこの二人の素質は大きく異なっている。

エリナーにとっての野心は自分自身のためのものだ。それは彼女の心の中に常に巣くっており、王に忠誠を尽くそうとしている夫に、その意志を無視して謀反をけしかける。彼女は声高に、次のように不満を語る。

*"Eleanor Follow I must; I cannot go before,/ While Gloucester bears this base and humble mind./ Were I a man, a duke, and next of blood,/ I would remove these tedious stumbling-blocks/ And smooth my way upon their headless necks. "(Part2, A.1,S.2)*

マクベス夫人の場合、大切なのは夫であるマクベスが潜在している望みを遂げること、それによって彼が権力者の地位につくことであり、この夫婦の間には確かに愛情が感じられる。そしてマクベスが優柔不断な心を持つために、より心弱い女であるはずの夫人は、彼を奮い立たせるためかなりの無理をして良心を抑えこみ、その重荷が結局、彼女の精神を変調させ死に追いやるのである。

一方、エリナーにとって重要なのは自分であり、夫をけしかけるのは自身が王妃という座につきたいがためである。心に葛藤をもたない彼女には、陰謀を巡らすという智恵もわいてこない。単純な彼女は呪術師を雇い、王に呪いをかけようと画策する。だが、耳に快いお世辞にすぐいい気になってしまう軽薄さを利用され、逆にサフォークらの罠にかかり、王に対する反逆の罪で逮捕されてしまう。そしてエリナーの罪に責任を負う形で、グロスターもその地位から追い落とされてしまうのだ。

『第2部』1幕3場はなかなか興味深い。訴願人たちが摂政を待ち受けているところに、マーガレットとサフ

ォークが二人連れで現れる。

*"1 Pet. Here a comes, methinks, and the Queen with him. I'll be the first, sure.*

*2 Pet. Come back, fool; this is the Duke of Suffolk and not my Lord Protector. "(Part2, A.1,S.3)*

何気ない台詞だが、含むものは多い。サフォークが摂政グロスターと見間違えられたということ、それは彼サフォークが摂政然とした傲慢な態度をとっていることを示す。その態度は彼が公爵という地位に叙せられグロスターたちと肩を並べたこと、王妃の心をつかみ、彼女を通して気弱な王を左右することができる、実質的に「摂政」としての力を握ったことから出てきている。更に言うと、サフォークの姿がまず見えて次に王妃、つまりサフォークは王妃を「従えて」登場した。このこともサフォークとマーガレットの関係を暗示している。サフォークが主、マーガレットが従の形である。が、マーガレットがいなければサフォークは王に重用されるきっかけをもてなかった。また王妃と繋がっていることで、彼は他の貴族たちをしのぐ地位を保つことができる。つまりマーガレットはサフォークの命綱というべき存在だ。

場面は本来、フランス摂政の地位をヨークに留めるか、サマセットに与えるかの論争で始まったのだったが、王は判断を回避し、王妃マーガレットが王に代わって、グロスター派と見られたヨークを罷免する意見を出す。

*"Gloucester Madam, the King is old enough himself/ To give his censure. These are no women's matters.*

*Margaret If he be old enough, what needs your Grace/ To be Protector of his Excellence?*

*Glo. Madam, I am Protector of the realm;/ And at his pleasure will resign my place.*

*Suffolk Resign it then, and leave thine insolence. "*

*(Part2, A.1,S.3)*

マーガレットの王妃という立場がサフォークに力を与え、グロスターに反対する貴族たちも王妃をたてることで王に繋がり、力を得ることができる。次々と糾弾の言葉がグロスターに投げつけられる。王は摂政の味方をしたはずなのだが、一言も発しようとはしない。グロスターはその場を立ち去る。マーガレットは侍女と人違いしたふりでエリナーのほおを打ち、溜飲を下げる。

まもなくエリナーは追放され、グロスターも大逆罪で逮捕される。そしてサフォークは刺客を放って、彼を暗殺させる。だが、これが彼に墓穴を掘らせることになった。グロスターを敬愛していた民衆が、サフォークの処罰を求めて王宮に押し寄せてきた。何ごとにも優柔不断で自分の意志を表すことのなかったヘンリー王は、ここで決然と、王としての命令を下す。サフォークの追放で



ある。マーガレットとサフォークの関係を知る観客からは、その決定が単に政治的なものに留まらず、個人的な報復の色合いをも帯びていると感ぜられるだろう。

*"King Ungentle Queen, to call him gentle Suffolk."*

*(Part2, A.3,S.2)*

サフォークを弁護するマーガレットをたしなめる王の言葉は、同時に彼女がサフォークと同類であることを意味しているようだ。であれば、これは王の側からのしっぺ返しということになる。サフォークとマーガレットがグロスターに取って代わろうとして動いたことを、彼は感じていたに違いない。

追放刑を受けたサフォークとマーガレット二人だけの、長い別れの場面がくる。ここでマーガレットは素直に、彼女のサフォークへの愛情と別れの悲しさを吐露する。互いに相手と別れることは死ぬに等しい悲しみだと言ひ、口づけを交わし合う。『ロミオとジュリエット』の一場面を思い出させるような、切々たる別離である。

*"Margaret O, could this kiss be printed in thy hand,/ That thou might'st think upon these by the seal,/ Through whom a thousand sighs are breath'd for thee!/ So, get thee gone, that I may know my grief;/ Go, speak not to me; even now be gone./ O, go not yet! Even thus two friends condemn'd/ Embrace, and kiss, and take ten thousand leaves,/ Loather a hundred times to part than die./ Yet now farewell.*

*Suffolk Thus is poor Suffolk ten times banished,/ Once by the King and three times thrice by thee./ 'Tis not the land I care for, wert thou thence/ Live thou to joy thy life;/ Myself no joy in nought but that thou liv'st."*

*(Part2, A.3,S.2)*

別れを告げながら、何度も立ち戻る、呼び返すというのは、『ロミオとジュリエット』でも使っていた技法である。命よりも愛情を優先したいという気持ちと、相手を死なせたくないという気持ちがよく表され、美しく情熱的な言葉が二人の間に交わされてゆく。

この場面は先行する2幕4場で描かれる、グロスターと妻エリナーの愚痴と叱責にあふれる別れの場面と対比され、二人の愛情の深さを強く印象づけることになる。

だがマーガレットの願いに反して、これが二人の最後の対面になってしまった。サフォークはフランスに向かう途中、海賊に捕らえられて惨めに殺されてしまう。そして「サフォークとともに」あったマーガレットは、サフォークなしで、このイングランドの混乱の世界を更に進んでゆくことになるのだ。

#### 4. ヘンリー六世の人物像

この論はマーガレットを中心として述べてきている。彼女の前では、ヘンリー六世はただの飾り、案山子のような存在意義しかもたされていない。だが『ヘンリー六世』三部作の世界を見渡す上で彼の人となりを考えることはやはり必要である。

シェイクスピアが書いた、一連の時代を背景にした歴史劇には、リチャード二世、ヘンリー四世、ヘンリー五世、ヘンリー六世、エドワード四世、リチャード三世、ヘンリー七世、ヘンリー八世（ただし、『ヘンリー八世』はシェイクスピアの単独作ではないと一般にみなされているが）と、八人の王が登場する。このうちで王位を奪われる人物は、リチャード二世、ヘンリー六世、リチャード三世の三人。いずれも王としての素質に欠けた、暗君もしくは暴君として描かれている。

リチャード二世は猜疑心が強く、例えばジョン・オブ・ゴントの如く、国に忠心を尽くそうとする臣下をも冷遇して遠ざけ、国民の人望を失った。その後を襲ったボーリングブルック（ヘンリー四世）は国民の支持を得た王ではあったが、武力をもって王を追い落としたがために、治世の間中、内乱の火種がくすぶり続け、ヘンリー四世は心の落ち着く暇がなかった。

ヘンリー六世は世間への興味を欠いた無能力者である。しかし信仰心の篤い善人ではあった。それだから、彼から王位を篡奪したエドワード四世のヨーク家は、同じ血を流し合う悲惨さの中に落ち込んでゆく。

リチャード三世は悪意の塊の暴君である。彼を倒すことこそ「正義」と見なされ、その体現者たるリッチモンド（ヘンリー七世）は光輝ある英雄として描き出された。

しかしヘンリー六世は、単に哀れな結末を迎える暗君であるだけではない。彼は八人の王の中で、いや王位を目指して果たせなかった多くの貴族たちをも含めた中でただ一人、権力を目指そうとしない人物として描かれているのだ。王の地位にあるのだから、権力を目指さないと表現するのがおかしいのであれば、権力の座を守ることにこだわらなかった人物だと言い直そう。

既述したマーガレットの言葉を思い返せば、彼は聖職者のように信心深く、世俗のことには深入りせず、後見人であるグロスターの言いなりになって満足している人物である。ジャック・ケイド率いる暴徒が攻め寄せた時も、ヨークが軍を率いて迫った時も、彼は逃げ出すことのみを考えた。そして暴動がおさまリケイドの首が届けられた時は神に感謝し、ヨークの軍勢に対しては自ら旗印となることを拒み、マーガレットがヨーク軍を追い散

らかしてくれることを望んだ。彼は非情な人間ではない。戦場で苦しみながら死んでゆく兵士たちのつらさを理解する。知らずして父親を殺した兵士、息子を殺した兵士の身もだえするような嘆きに共感することができる。人としてなら、彼は良き隣人であったろう。だが王としては、人が頼みに出来る存在ではなかった。

ヨークと対峙した時、彼は相手の方により強い「王位継承権」があると認めた。揺りかごの中からの王でありながら、臣下の身分になりたいと熱望した。それでも彼は王であることをやめることは許されなかった。始めは国のために。それは摂政グロスターによって支えられていた。それから、皇太子を王にしようとするマーガレットによって。彼は誰よりも、マーガレットに逆らえなかった。もしそれができていたら、彼の悲劇はもう少しましなところで終わっていただろうし、イングランドの混乱も短くて済んだであろう。

彼のこの無気力な「お坊ちゃん」気質、マーガレットへの頼り切りは、何に拠って来たのであろう。この小論の主旨に従って別の見方をするなら、彼にとってマーガレットは何であったか。

筆者は、ヘンリー六世が何故マーガレットと結婚したのかということに注意したい。

戯曲に従って述べることになるが、『ヘンリー六世第一部』の5幕1場で摂政グロスターによって、既にヘンリーの結婚相手はフランスの実力者アルマニャック伯の一人娘に決められていた。フランスとの和平と友好を強めるための方策である。ヘンリーはそのことについて、結婚よりも学問に興味があると言いつつも、国の繁栄にかなうものであるならば受け入れようと語った。ところが実際には、彼はグロスターの意志を無にし、サフォーク伯の言葉を入れ、イングランドにとって何の利益にもならない貧乏貴族の娘であるマーガレットを結婚相手に選んでしまう、フランス領土の幾つかを手放してまで。これはヘンリー六世の性格を考えれば奇妙なことである。彼にグロスターに逆らおうとする気持ちがあったわけではない。であれば、マーガレットにヘンリーを惹きつける強い力があったからという、単純な答えが理由であるはずだ。では彼女の何がヘンリーを惹きつけたのか。

ヘンリー六世は父親の死にともない生後9ヶ月で即位した。だから父親を知らない。母親カトリーヌは敵国フランスの王妃であって、アジンコートに勝利して勢いに乗るイングランドとの関係を良くするために計画された結婚だった。カトリーヌは輝くばかりの美貌と知性の持ち主で、ヘンリー五世の心を瞬時にとらえた。ただ彼女の父親は精神病の気があり、ヘンリー六世にも、成長にともなってその傾向が現れてくる。さらにカ

トリーヌの母親は美しくはあるが残忍な性格だったと伝わっている。おそらくそれも精神的なものが原因だったのではないか。2年ほどの結婚生活で、ヘンリー五世が亡くなる。こうした場合、普通は外国から迎えられた王妃は自国に戻るのであるが、カトリーヌはイングランドに軟禁状態におかれる。不自由な生活の中で、やがて彼女は細やかに世話をしてくれる衣装係のオーウェンに心を許し、と身分違いの結婚をしてしまう。この事件はシェイクスピアの喜劇『十二夜』の中で、女主人に愛されていると誤解した執事マルヴォーリオが空想にふけりながら口にする傍白でも触れられている。このオーウェンとカトリーヌの間に出来たエドモンド・チューダーの息子がリッチモンド（ヘンリー七世）である。『ヘンリー六世第3部』の中でヘンリーがこのリッチモンド少年と対面し、彼の後を継ぐ人物になると予言する場面（4幕6場）がある。だがヘンリー六世が物心つくころには、カトリーヌは彼の周辺にはいなかった。父親ヘンリー五世を追憶するためのよすがは、彼の周りであった。後見人のグロスター公を始め、その兄弟たちがいたからだ。だが、母親のカトリーヌを偲ばせる存在はいなかった。もし彼が心冷たい人物であったなら、それはなんでもなかったであろう。だが信心深く感受性に富むヘンリーには、知らない母親に対する追慕の念が大きくなっていくと考えることは自然である。マーガレットにファーザーコンプレックスが見て取れるように、ヘンリーの精神にはマザーコンプレックスが根付いていたのではないか。だから彼は、輝くような美貌と知性の持ち主であるフランス女性に強く惹きつけられ、その強いリーダーシップに身を委ねることを厭わなかった、むしろ自ら受け入れたのではなかったろうか。そのように考えてくれば、私たちはヘンリー六世の、いつまでも乳離れしない依存的な幼児的精神の理由が、なるほどと納得できるのではないか。

## 5. マーガレットの転換点 (2)

### 5.1 王に代わって (For Henry)

『第2部』4幕4場でサフォークの死を知ったマーガレットが登場するが、それはかなり異様な様子である。王はバッキンガム公らを伴い、ジャック・ケイドの反乱軍からの請願書に目を通しながら登場する。そして王妃も同時に姿を現すのであるが、その時彼女は手にサフォークの首を持ち、いとおしげに抱きしめているのだ。

*"Margaret Oft have I heard that grief softens the mind/ And makes it fearful and degenerate;/ But who can cease to weep, and look on this/ Here may his head lie on my*



*throbbing breast;/ But where's the body that I should embrace?" (Part2, A.4,S.4)*

もちろんこのような大胆で奇怪な場面が、現実に展開されたはずはない。作者はこのような不思議な場面を創作することで、マーガレットとヘンリー王の関係を、あらためて観客に強調する。マーガレットはサフォークへの愛情を、夫であるヘンリー王に対してまるで隠そうとしない。彼女はそれだけサフォークを愛していただけでなく、ヘンリーを軽んじているのである。ただし、軽くみているのは無能力者としてのヘンリー個人であって、王という地位をではない。

サフォークの方に振れていたマーガレットという「針」は、サフォークがいなくなることで、本来ならヘンリー王の方に振れ戻ってきそうなものである。確かに、サフォークに代わって彼女をひきつけるべき「目盛り」は存在しない。他に寄るべきものを持たないマーガレットは、王妃という立場上、ヘンリー王とともに立つことになる。

*"King Thou wouldst not have mourn'd so much for me.  
Margaret No, my love, I should not mourn, but die for thee."  
(Part2, A.4,S.4)*

王の皮肉(?)な言葉に対する彼女の返事は一見、悲しむまもなく死んでしまうという、愛情のこもった言葉に思えるかもしれない。だがもちろん、そんなしおらしい言葉ではあり得ない。ここに愛情はまるで感じられない。では「あの世へお供する」とはどういうことか。王がいなければ、王妃は存在しない。外国から迎えられた彼女が立場を守っていられるのは、王ヘンリーがあつてこそだ。だからヘンリーが死ねば、この時点でまだ皇太子を産んでいないマーガレットは、すべての地位を失ってしまう。それは彼女のプライドにとって、耐え難いことである。であれば、ヘンリーが死ぬ時その「王位」とともに自分も死んでしまうというのは、きわめて当然の気持ちなのである。

この場面で、マーガレットはサフォークの死がもたらしたショックから、まだ回復していない。そして、反乱軍から逃れるため王宮から退こうとする王の姿は、王の権威への彼女の信頼をすっかり壊してしまったろう。

*"Margaret My hope is gone, now Suffolk is deceas'd"  
(Part2, A.4,S.4)*

彼女の次の登場場面では、暴徒が制圧されたこと、それに代わって今度はヨーク公が兵を挙げてロンドンに迫ってくるのが告げられる。この場面で、マーガレットは口を開かない。逆にヘンリーが、ヨークの機嫌を取るために策を巡らせる。これはヘンリーとマーガレットの力の逆転の可能性を予期させた。だが、大事なところで

躊躇するヘンリーの性格は、結局マーガレットに再び自分を凌ぐ機会を与えてしまう。

彼女が気を取り直したのは、ヨーク公という格好の敵を得たことが大きいだろう。暴徒が鎮圧され、王の権威は守られた。グロスター、ボーフォートといった王の親族たちは死に、ランカスター家において王に取って代わる人物はいなくなった。であればヘンリー王の立場は安定するはずなのに、ヨーク家という対立者が王位を脅かし始めたのである。しかも情けないことにヘンリー自身が、ヨークの方が自分より王位継承権は強いと認めている。このままヘンリーが先頭に立っていても、王位はヨークに奪われてしまうに違いない。敵愾心がマーガレットに元気を与える。そして彼女はヘンリーに代わってランカスター家を率い、対ヨークの戦いを始めるのだ。「バラ戦争」の開始である。

マーガレットはランカスター方の貴族を次々に将軍に任命してはヨークとの戦いを続けてゆく。ヘンリー王は自分たちの敗北を神の意志と受け止め、早速と戦いを諦め死を望みずらする（現世からの逃避）のだが、彼女は戦局が不利になっても戦いを投げ出すことはない。

*"Margaret Away, my lord! You are slow; for shame, away!  
King Can we outrun the heavens? Good Margaret, stay.  
Margaret What are you made of? You'll not fight nor fly."  
(Part2, A.5,S.2)*

あきらめてしまうこと、それこそマーガレットが最も嫌うことなのだ。彼女は何度も勝ったり負けたりを繰り返す。ちょうど、『第1部』のジャンヌ・ダルクのように。戦場を駆ける二人の女性は、次第に似てくる。

## 5.2 彼女の息子、皇太子のために

### (For her son, Prince of Wales)

「戦場のマーガレット」は大体一つの人格として受け止められるのだが、それでも一つの大きな切れ目がある。ヨークに捕らえられ譲位を迫られたヘンリー王が、仕方なく条件つきで譲位を認める宣告をする。

*"King My Lord of Warwick, hear but one word;/ Let me for this my life-time reign as king.  
York Confirm the crown tome and to mine heirs;/ And thou shalt reign in quiet while thou liv'st.  
King I am content." (Part3, A.1,S.1)*

これは「バラ戦争」を終わらせる機会であった。王ヘンリーは、それで良いと思った。だが、この時点でヘンリーとの間に皇太子を設けていたマーガレットには、これは許されないことだった。皇太子の地位を剥奪することは、自分が将来、国王の母となる道をも閉ざすことになる。であれば、彼女の立場は再び極めて不安定なもの

に落ちてしまう。母として息子のために、そしてまた自分のために、彼女はヘンリーの取引を許せない。それはまた、王位という高貴なものを取引の種にすることへの怒りでもあった。

*"King Be patient, gentle queen, and I will stay.*

*Margaret Who can be patient in such extremes?/ Ah, wretched man! Would I had died a maid, never borne thee son, /Seeing thou hast prov'd so unnatural a father! ...*

*Prince Father, you cannot disinherit me./ If you be King, why should not I succeed?*

*King Pardon me, Margaret; pardon me, sweet son./ The Earl of Warwick and the the Duke enforc'd me.*

*Margaret Enforc'd thee! Art thou King and wilt be forc'd? I shame to hear thee speak. Ah, timorous wretch! / Thou hast undone thyself, thy son, and me;/ Thou prefer'st thy life before thine honour; / and seeing thou dost, I here divorce myself/ Both from thy table, Henry, and thy bed./ The northern lords that have forsworn thy colours / Will follow mine, if once they see them spread;/ Come, son, let's away.*

*King Stay, gentle Margaret, and hear me speak.*

*Margaret Thou hast spoke too much already; get thee gone.*

*King Gentle son Edward, thou wilt stay with me?*

*Prince When I return with victory from the field./ I'll see your Grace; till then I'll follow her.*

*King Poor Queen! How love to me and to her son/ Hath made her break out into terms of rage! Reveng'd may she be on that hateful Duke."(Part3, A.1,S.1)* (下線は筆者)

王の言葉通り、この戦いは彼女自身の戦いになった。ヘンリー王との決別を口にしたマーガレットにとって、もはやヘンリー王は旗印ではない、息子の皇太子こそ旗印になる。そして野心と遺恨に駆られた貴族たちは、彼女のもとに集まってくる。マーガレットはヘンリー王に代わってではなく、自分自身を先頭に立て、息子である皇太子のために戦いを続けてゆく。次第に女性らしさを捨て、敵に対して残酷な策略家としての要素を強めて行く。言い換えよう、彼女は「人間」から「役割」へと変わってゆくのだ。イングランドを一度どん底まで落とそうとする、一つの残酷な意思の具現化が、彼女の最後の仕事だった。残酷、といったけれど、それは彼女に気の毒すぎる。彼女は権力闘争の裏に隠されていたひとつの「欺瞞」を表に表しただけなのだ。何の実体もないものが、人々の欲によって「至高」の仮面をかぶるという欺瞞を。

『第3部』1幕4場で、ヨークを捕らえた彼女が、彼に紙の王冠をかぶせて笑いものにした上で惨殺する場面がある。その時マーガレットが見せる酷さには、敵将タ

ールボットの死体を辱めようとしたジャンヌ・ダルクに通じるものがある。ここでヨークが吐く有名な台詞は、彼の恨み言に留まらず、観客の感想でもある。

*"York O tiger's heart wrapp'd in a woman's hide!"*

*(Part3, A.1,S.4)*

マーガレットがヨークを辱めたのは、ヨークによってランカスターの王位から権威が引きはがされたその仕返しと、神聖であるべき王位を篡奪した者への懲罰を意図したからであろう。そして篡奪者へ与えられる王位は、所詮紙の王冠、つまり偽物の地位でしかないということを示したかったのであろう。だがそれなら、ヘンリーに本物の王冠を戴く資格はあったのだろうか。いや、はたしてイングランドの誰に、本物の王冠を戴くことができたのだろうか。イングランドの王位はこの時、ある意味で「紙の王冠」に一致していたのだ。『リチャード三世』でリチャードが叫んだ最後の言葉、「馬をくれたら、国をやるぞ」にも見えてくる王位の重さ、いや軽さは、この紙の王冠とどこかでつながってゆく。

やがて戦いはランカスター家の敗北に終わり、ヘンリー六世も皇太子もヨークの息子たちに殺された。マーガレットはすべての権力をはぎ取られる。史実に拠るなら彼女はフランスに帰りその地で死を迎えるのであるが、シェイクスピアは『ヘンリー六世』三部作に続く『リチャード三世』においても、彼女を不吉な予言者、運命を見守る者として登場させている。彼女はリチャードが倒されてヘンリー七世が即位するまで、つまりヨーク家とランカスター家の血が結びつき「バラ戦争」が本当に終結するまで、この劇世界に存在し続けるのである。(了)

---

◎本稿ではThe Arden Shakespeare版 "King Henry VI Part 1, Part 2, and Part 3" edited by Andrew S. Cairncross を底本にした。ただし、引用した台詞の発話者の名前は便宜のため "Margaret" に統一した。

◎参考図書で主なものをあげる。

テキスト: The New Shakespeare (Cambridge University Press), The New Penguin Shakespeare, Shakespeare Complete Works (Collins) 等。

翻訳書: 坪内逍遙訳 (中央公論社)、小津次郎・大場健治訳『第2部』、小津・武井ナヲエ訳『第3部』(筑摩書房)、小田島雄治訳 (白水社) 等。

研究・評論書: "Shakespeare's Playhouse Practice" by Warren. D. Smith (University Press of New England), "Shakespeare: A Suvey" by E. K. Chambers (Penguin Books)、『シェイクスピアの歴史劇』日本シェイクスピア協会編 (研究社) 等。